

# 道連ニュース

2020年10月号 No.168

北海道生活協同組合連合会

〒003-0803 札幌市白石区菊水3条4丁目1-3

こくみん共済北海道会館内

TEL 011-841-8601 FAX 011-841-8605

URL: <http://www.doren.coop>

## コープさっぽろ 農協と連携した集落の買物対策の取組

コープさっぽろでは、7月3日から幕別町農協の糠内事業所、駒島事業所の前で移動販売車の試験運行を開始しました。

幕別町農協では購買店舗Aコープ3店舗の営業を、2006年に帯広市内の食品卸売会社と共同出資して設立した「十勝フーズ」に経営を引き継ぎ、以来「JAコープ」として営業してきましたが、売上の低迷や経営者の高齢化などにより、2014年と2017年に2店舗が閉店し、最後に残った「ぬかない店」も2019年に閉店しました。この閉店により、幕別町農協管内の駒島地区と糠内地区では15km以内に食品スーパーが無い生活となり、昨年、農協からコープさっぽろに買物対策の要請、特に移動販売の強い要請をいただきました。

従来のコープさっぽろの移動販売は、事業継続に必要な最小限の供給が確保できるように人口密度の高い地域を中心にコースを設定しているため、今回の糠内、駒島両地区のように、周辺の集落から離れていて移動時間が長く、人口が少ない集落への対応は困難ですが、幕別町内に限らず、食品スーパーの無店舗地域が全道で拡大している中、民間事業者単独での事業展開が困難な地域では、地域と協働した新たな買物対策が必要です。そこで今年5月に幕別町農協とコープさっぽろで「生活物資供給に関する連携協定」を締結し、まずは

移動販売の試験運行を実施し、農協とコープの双方で利用状況や事業継続に向けた課題と協力体制を検討することにしていきます。

農協は各地域に拠点を持っており、住民との繋がりが深いため、今後は農協での注文の取りまとめや、置き置きなど、新たな運用方法についても検討しています。また役場も集落の買物対策として注目をしております。

コープさっぽろでは、この幕別町での事例を検証、進化させることで、全道の買物状況改善につなげられればと考えています。



JA糠内事業所(旧店舗)と、移動販売車。近所のお年寄りが毎回利用しています。



初日の駒島事業所での接客風景

## 生活クラブ あったらしいな こんな地域福祉～生活クラブ館・とよひら

組合員の力を結集し、様々なしくみをつくってきた生活クラブ。本当に必要なものは何かを一人ひとりが考え話し合い、共感する仲間を増やし実現していく、そういうプロセスを大事にしながら今日まで進んできました。安心安全な食の共同購入事業とともに協同組合の理念に基き誰もがその人らしく生きる社会をつくろうと早くから福祉にも取り組み始め、豊平区で生活クラブデイサービスセンター「デイこたけ」を運営し高齢者福祉に取り組んで20年近くになります。

2016年デイサービスセンター「デイこたけ」に隣接している土地を購入し、4年かけて組合員活動の中で培ってきた、たすけあいのしくみを地域の中にも広げていける地域福祉拠点を作りました。この間、地域ニーズの調査や組合員への呼びかけを何度も行い、楽しい夢もたくさん語られた中で見えてきたのは、「地域の中に多様な人が安心できる居場所があ

ったらしいな」でした。

そこで地域の人と人がつながるきっかけの一つを「食」と考え、食を中心に置いた居場所作りを「ワーカーズぼんこたん」を立ち上げ進めました。生活クラブ館・とよひらは化学物質過敏症の方にも配慮した優しい空間となっており、2Fは貸室もしており、地域の人が集う事も出来ます。

デイサービスセンター、ケアプランセンター、そして食と居場所作りのワーカーズぼんこたん、生活クラブが各々アイデアやノウハウを持ち寄って生活クラブ館・とよひらから地域福祉のモデルを発信していきます。めざすは地域に開かれた拠点。誰よりもここで暮らす地域のみなさんが集い、温かな人のつながりができ、ここの存在が安心や生きがいにつながっていく。そんなモデルを示していけたらと考えています。

(生活クラブ福祉担当理事 小松 真理)



生活クラブ館・とよひら

2020年7月13日オープン

住所:062-0053

札幌市豊平区月寒東3条4

丁目1-3

カフェぼんこたん

9:30～17:00 (月～土)

# ～コロナ休校中の学生支援のあり方 新型コロナウイルス“COVID-19”と大学生協による支援～

生活協同組合連合会大学生協事業連合  
副理事長 吉見 宏



新型コロナウイルスは、グローバルに影響を及ぼしている。ここでグローバルとは、地理的な意味での「世界」だけでなく、社会のあらゆる側面、世代のほか、まさに「全体」を意味している。だから、これは世界中のあらゆる人々にとって「他人ごと」ではない

これは、支援にも影響をあたえる。新型コロナウイルス流行の下では、助け合い、あるいは支援は、誰かが誰かを支援するだけでなく、同時に支援する側も、何らかの形で支援される側でもあるということである。もちろん、その緊急性や逼迫度には違いはある。新型コロナウイルスに罹患し、今まさに病院で苦しんでいる患者さんは最も支援されなければならない人々であろうが治療にあたる医療関係者もまた、支援を必要とされる人々に違いない

助け合いは生協の最も基本的な理念だといえる。加入した組合員同士が支援しあうことができる組織として、生協はある。だから、支援を必要とする組合員がいれば、その組合員のために他の組合員が支援する。これは生協同士でも同じであって、これまでも、たとえば経営困難に陥った生協があれば、他の生協がこれを支援してきた。さらに、各大学の生協以外に、連合会や共済連、事業連合が生協同士の連帯、つまり助け合いのために存在している

新型コロナウイルスがやっかいだと思うのは、各組合員も各生協も、他者を支援する必要があると同時に自らも支援される必要がある状況に、同じタイミングで直面してしまっているというところだ。比喩的になるが、弱った人がいたときには、普通は元気な人がそれを支援するものだ。弱った人が弱った人を無理をして支援すると、共倒れになってしまう危険性もある。生協だって、その組合員だって同じ。だから、無理をせず、それぞれができる範囲での支援をしよう、そしてそれでも困ったら、狭い範囲で問題を抱え込まずに、外部にもSOSを出して、より広いネットワークで支えていこう、そういう動きをするしかない

新型コロナウイルスの時代に大学生協が学生組合員を支援するとき、経済的な支援を含めて、やりたいことは山ほどあるが、できないこともあることは認識しておかねばならない。なぜなら、生協自身も支援が必要な状況なのだ。遠隔授業が広がり、学生のいないキャンパスを事業区域とする大学生協は、どの生協であっても未曾有の供給減に陥っている。もちろん、経営に対する影響の深刻さは、各生協によって異なるには違いない。そのとき、自分の大学の組合員を支援できる生協もあれば、それができない生協も出てくるだろう。このとき、少しでも余裕や元気があれば、他の支援の緊急度の高い生協とその組合員を助ける助け合いも、今このときだからこそ必要になる

それ以前に、この状況下で各生協がすべきことは、組合員ができるだけ通常と同じような大学生活を送れるように、事業を続けることがまずは基本になる。それは、食事、教科書、必要な物品の供給。しかしその供給の方法は、店舗で販売する、食堂で食事してもらうといったこれまでの方法では、学生組合員の支援にはならないかもしれない。今まで供給してこなかったもの、ことを、今までとは異なる方法で供給する必要も出てくる。まずは、何がいま学生に必要なのかを、通常の事業から少し広げて考える必要がある

日本では、「新型コロナウイルス」が名称として定着しているようだが、世界ではWHOが名付けたCOVID-19が呼称としては普通。考えてみると、もはや「新型」ではなく、日常生活の中で普通に存在するウイルスになりつつある。それでも、今後は各国ごとに支援を必要とする深刻さは異なってくるだろう。実は生協も国際的にある組織なのだが、海外の大学生協との連帯は、意外におこなわれてこなかった。必要があれば、海外の大学生協に支援を求めることがあってもいいし、我々に余力が出てくれば、そのときには支援を必要とする海外の大学生協との連帯、助け合いも必要なのではないか。日本だけの「新型コロナウイルス」ではなく、世界の「COVID-19」は、大学生協の助け合いのあり方を考え直す機会にもなりそうだ

～大学生協連ホームページ 2020年5月14日掲載  
『特集 コロナ休校中の学生支援のあり方』より転載～